完成した子の大絵馬を前にする芳賀中アート部員と越口宮司（左端）

【芳賀】芳賀中アート部は26日、西水沼の天満宮に来年の干支「子」を描いた大絵馬２枚を奉納し、2008年から歴代の部員たちが毎年手掛けてきた十二支の絵馬が全てそろった。12年前に同校へ制作を依頼した越口正一宮司（68）は「どの絵馬も生徒たちの素晴らしい力作」と感謝し、27日から来年３月末まで初めて十二支の絵馬を境内に掲示し新たな一年の幸運や繁栄を願う。（茂木信幸）

子の絵馬奉納 十二支が完成

天満宮に芳賀中アート部

歴代力作、来春まで掲示

子の大絵馬は縦1㍍、横1・2㍍。1枚はオレンジ色がベースのさんさんと輝く太陽、もう1枚は青を基調とした月明かりを背景に、天満宮の祭神で学問の神様菅原道真が愛したウメの花や縁起の良い「百福」「豊楽」の文字とともに、それぞれ9匹のネズミをアクリル絵の具で鮮やかにデザインした。

部員の1、2年生20人の大半が11月後半から制作に携わり、休日なども利用して仕上げた。いずれも2年で部長の岡野明日香さん（14）と副部長の戸口和香奈さん（14）、酒井奏さん（14）は「ネズミのデフォルメと、太陽と月の色調の変化の出し方が難しかったが、イメージ通りの作品になった」と笑顔を見せた。

寺子屋の様子を描いた絵馬が天満宮に奉納されていることから、越口宮司が08年当時の同校に「生徒に十二支の絵馬を描いてもらえないか」と要請したのがきっかけ。学校側も「生徒の作品発表の場になる」と快諾し、道真の生まれ年の丑を皮切りにアート部が毎年12月に翌年の干支の大絵馬2枚を奉納し、今回が節目となった。

子の大絵馬2枚は拝殿前に掲示されたほか、これまでの十一支の大絵馬計22枚も参道の一部約20㍍の両端に初めて一斉に飾られ、参拝客らを出迎える。

越口宮司は「子は子孫繁栄の縁起の良い干支。生徒の作品を多くの方に鑑賞してもらうとともに災害の少ない平和で活気に満ちた一年となることを願いたい」と話している。問天満宮028・678・1138。

12/27（金）下野新聞